早稲田大学大学院教育学研究科紀要　第二十六号　二〇一六年三月

『大東世語』「簡傲」篇注釈稿

堀　誠・呂　天雯・折原　佑実・樋口　敦士
永瀬　恵子・馮　超鴻・高橋　憲子・奥田　惇
篭尾　知佳・山中　明

〔凡例〕

一、本稿は、服部南郭『大東世語』「簡傲」篇の本文と原注に関する注釈である。

一、注釈は、早稲田大学大学院教育学研究科二〇一五年度科目「国文学演習」（堀　誠担当）の受講生（呂天雯・折原佑実・樋口敦士・永瀬恵子・馮超鴻・高橋憲子・奥田惇・篭尾知佳・山中明）が講読担当話の発表資料に基づいて原稿化した。

一、底本は、早稲田大学図書館蔵本『大東世語』（寛延三年〈一七五〇〉刊）に依り、また典拠に関しては同館蔵本『大東世語考』（方寸菴漆鍋稿、寛延四年〈一七五一〉序）を参考にした。

一、「簡傲」篇の都合十三話を、〔簡傲1〕のように順次表記した。

一、注釈は本文の〔書き下し文〕・〔訳文〕、原注の〔書き下し文〕・〔訳文〕、および〔語釈〕、〔典拠〕から構成される。

一、〔書き下し文〕は、原則として底本の訓点を尊重しつつ、適宜これを改めた。

〔簡傲1〕

野相公不羈率直。人呼爲二野狂一①。公傲然作レ詩云。暗作二野人一天與性。自レ古狂官世呼名。

〔書き下し文〕

野相公不羈にして率直なり。人呼びて野狂と爲す。公傲然として詩を作りて云く、「暗に野人と作す天與の性、古自(よ)り狂官は世呼の名」と。

〔訳文〕

野相公（小野篁）は自由気ままで、飾り気がない。人は彼を野狂と呼んだ。彼は傍若無人で、作った詩には「世の人は陰(かげ)で、私を『野人』

と呼ぶが、それは天が私に与えてくれた性格であり、我が姓でもある。昔から『狂官』と呼ばれたが、それは世の人が私の名（篁）を言う呼称である」とあった。

〔原注〕

①篁狂方音相近。

〔書き下し文〕

①篁と狂は方に音相近し。

〔訳文〕

①篁と狂とは発音が通じる。

〔語釈〕

野相公　小野篁。八〇二～八五三。野宰相とも呼ばれる。平安時代前期の公卿・文人。『凌雲集』の撰者小野岑守の長男。従三位参議に至る。承和元年（八三四）遣唐副使となったが、船舶のことで大使藤原常嗣と争い、「西海謡」を作って遣唐の役を風刺したため、一時、隠岐国へ流された。『令義解』の編纂に携わり、その序文を草した。詩文は『経国集』『扶桑集』『本朝文粋』などに見える。

不羈　物事に束縛されないで行動が自由気ままであること。

率直　ありのまま。すなお。まっすぐ。

野狂　小野篁の名前から転訛した言葉。「野」は「小野」の姓を掛ける。「篁」は呉音で「ワウ」と発音し、「狂」は『類聚名義抄』に和音「ワウ」と記す。

傲然　驕りたかぶって尊大に振舞うさま。

野人　粗野な人。ここでは、「野」に「小野」の姓を掛ける。

狂官　傲慢な官吏。ここでは、「狂」に小野篁の「篁」を掛ける。

天與　天の与えるもの。

世呼　世間の人々が呼ぶこと。

〔典拠〕

『江談抄』第四―第二十四話「暗に野人と作す天與の性、狂官古自り世呼の名」。

〔備考〕

典拠ではこの句は小野篁の詩「惟十四に酬ゆ」によるとされているが、未詳。

（呂　天雯）

〔簡傲2〕

増賀顚狂疾レ世①。其師慈慧受二僧正命一。入謝。翼従甚盛。賀來。故帯二乾魚一爲レ劔乘二痩牸牛一。厠二列先驅一。衆叱去レ之。賀厲レ聲曰。今日前驅。舎レ我誰歟。

〔書き下し文〕

増賀　顚狂にして世を疾む。其の師慈慧　僧正の命を受け、入りて謝す。翼従甚だ盛んなり。賀來たる。故らに乾魚を帯して劔と爲し、痩牸牛に乗り、先駆に厠列す。衆叱して之を去らしむ。賀　聲を厲して曰く、「今日の前駆、我を舎て誰ぞや」と。

〔訳文〕

増賀は狂気の人であり、世俗を嫌っていた。彼の師である慈慧が僧正に任命され、参内してお礼申し上げた。左右の従者たちは威儀盛んであった。増賀がやって来ると、わざと干し魚を腰に帯びて剣とし、痩せた牝牛に乗り、先駆に混じって並んでいた。皆は叱りつけて増賀を立ち去らせようとした。増賀が声を張り上げて言うことには、「今日の先駆は、私をさしおいて誰が務められるというのか」と。

〔原注〕

①安和帝。嘗詔レ賀爲二供奉一。賀故佯狂垢汙而逃。太皇太后敬事。延二入宮中一。賀便復對二采女一出二麤語一而罷去。

〔書き下し文〕

①安和帝、嘗て賀に詔して供奉と爲す。賀故に佯狂垢汙して逃ぐ。太皇太后敬みて事へ、宮中に延き入る。賀便ち復た采女に對して麤語を出して罷り去る。

〔訳文〕

①冷泉天皇は、以前増賀に詔して供奉の者としたことがあった。増賀はわざと狂人のふりをし、垢にまみれ汚れた格好をして逃走した。皇太后は増賀を敬い、宮中に招き入れた。すると増賀は再び女官に対し暴言を吐いて退出した。

〔語釈〕

増賀　多武峰増賀。九一七～一〇〇三。平安中期の天台僧で、良源に師事した。

顕狂　気が狂うこと。狂人。

慈慧　良源。九一二～九八五。比叡山中興の祖で、第十八代天台座主。九七二年僧正となり、九八一年には大僧正となった。慈恵は諡号。著書に『九品往生義』がある。

僧正　僧官の最上位。

翼従　左右の従者。

牸牛　牝牛のこと。

先驅　行列の先払いをする者。

厠列　混じって並ぶ。厠は混じるの意。

厲聲　声を激しくする。

舎　おく。すておく。

安和帝　冷泉天皇のこと。九六七～九六九在位。

供奉　行列や祭礼などのときにお供の行列に加わる者。おとも。

佯狂　狂人のふりをする。佯は偽るの意。

垢汙　垢が付いて汚れる。

敬事　敬い慎んで仕えること。

采女　宮中の女官。

麤語　暴言。麤は、荒々しいこと。

〔典拠〕

『元亨釈書』巻第十「感進」二「多武峯増賀」。

（折原　佑実）

〔簡傲3〕

永延時、省中日給、有二建白者一。當三束帯見二謁者一。掘(堀)川右府時爲レ郎。乃著二韈一足一、直廬前、隔レ物出二一足一、示二謁者一。清議以爲動起二玩侮一。乃寢二白事一。

〔書き下し文〕

永延の時、省中の日給に、建白する者有り。當に束帯して謁者に見(まみ)ゆべし。堀川右府　時に郎と爲るに、乃ち韈(べつ)を一足に著け、直廬の前、物を隔てて一足を出して、謁者に示す。清議以爲らく動(やや)もすれば玩侮を起こすと。乃ち白事を寢(や)む。

〔訳文〕

永延年間のこと、宮中の当直において申し立てをする者がいた。それは衣冠束帯して取り次ぎ役に対面しなければならないというものであった。堀川右大臣が殿上人となったときに、したうづを片足にだけ履いて、直廬の前から物越しにその足を出して、取り次ぎ役に示した。（その行為について）議論したところ、もしや愚弄したものでないかとなった。そこでこの取り決めをやめにした。

〔語釈〕

永延　一条天皇時代の年号。九八七～九八九。

省中　宮中のこと。

日給　その日の当直。「日給簡」は、殿上の間に置かれてあって、昇殿を許された人の名が貼られてある木札。姓名の下に紙を貼り、出仕宿直、または不参の旨を記すもの。

建白　意見を立てて言上すること。

束帯　平安時代以降の天皇及び貴族の正装。衣冠が「宿直装束」と称されたのに対して、「昼の装束」と呼ばれた。

謁者　取り次ぎ役。ここでは蔵人を指す。

堀川右府　藤原頼宗。九九三～一〇六五。藤原道長の子。永承二年（一〇四七）に内大臣、康平三年（一〇六〇）に右大臣になる。歌人として藤原公任に次ぐ声望があり、『入道右大臣集』がある。

郎　官名。諸省に分属し、部の分科司の主任。秦に郎中令を置き、三署郎という。属官があり、専ら宿衛を司る。漢の時、別に侍郎、郎中を置いて侍従のことに当たらせ、事務に当たる者を尚書郎という。

韈　したうづ。足袋状の靴下のこと。

直廬　宿直するところ。

清議　世俗を忘れた清らかな議論。老荘に関する談話。ここでは公明正大な議論を指すか。

玩侮　物事を軽んじて慎まないこと。

白事　申し上げる。ここでは建白されたことを指す。

〔典拠〕

『古今著聞集』巻第三「公事第四」第九十話「堀川右大臣頼宗殿上の日給の起請を破る事」。

（樋口　敦士）

〔簡傲4〕

叡山寛印。負二其俊才一。蔑二視南北學徒一。但云。天下獨有二主恩一。當二我顧眄一耳。時興福主恩。有二義學名一。後以二麤語一忤二朝旨一。放在二西筑一。既而印亦竄二東州一。印曰。恩流二西海一。印在二東地一。我邦宗乘。已爲二凹字①一。

〔書き下し文〕

叡山の寛印、其の俊才を負ひ、南北の學徒を蔑視す。但だ云ふ、「天下獨り主恩有り、我が顧眄に當たるのみ」と。時に興福の主恩、義學の名有り。後に麤語を以て朝旨に忤り、放たれて西筑に在り。既にして印も亦た東州に竄せらる。印曰く、「恩　西海に流され、印　東地に在り。我が邦の宗乘、已に凹字を爲す」と。

〔訳文〕

比叡山の寛印は優れた才能を自負していたため、南都北嶺の学問する者たちを見下して言うことには、「天下には主恩が一人いるのみで、まさに私が顧みるに値する方です」と。時に興福寺の主恩には、体系的な学問の評判があった。後に暴言によって朝廷の意向にさからい、西の筑紫に放逐されて、やがて寛印もまた東州に流された。寛印が言うことには、「主恩は西海の地に流され、寛印は東の地に身を置いている。我が国で自宗の教義を極めた者が、すでに凹字のようにいなくなっているのだ」と。

〔原注〕

①寛印。事二楞嚴源信一。學業夙成。時宋人朱仁聰。來在二越敦賀一。信與レ印往見。朱出接レ之。乃指二壁間掛像一曰。是婆那婆演底守夜神也。師知二此神一乎。信乃把レ筆題二華嚴中善財讃嘆偈於其像上一曰。見二女清淨身一。相好超二世間一。令二印纘レ書。印復題曰。如二文殊師利一。亦如二寶山王一。朱嘆曰。大藏者皆二師之腸胃也。大尊敬レ之。

〔書き下し文〕

①寛印、楞嚴の源信に事へ、學業夙に成る。時に宋人　朱仁聰、來たりて越の敦賀に在り。信　印と往きて見ゆ。朱出でて之に接す。乃ち壁間の掛像を指して曰く、「是れ婆那婆演底守夜神なり。師此の神を知るや」と。信乃ち筆を把りて華嚴中善財讃嘆の偈を其の像の上に題して曰く、「女の清淨の身を見るに、相好　世間に超ゆ」と。印をして書を纘けしむ。印復た題して曰く、「文殊師利の如し。亦た寶山王の如し」と。朱嘆じて曰く、「大藏なる者は皆　二師の腸胃なり」と。大いに尊び之を敬ふ。

〔訳文〕

①寛印は楞厳院の源信に師事し、学業は若くに大成した。当時、宋の人である朱仁聡が来て越の国の敦賀にいた。源信は寛印と一緒に出掛けていき、朱に会った。朱は二人を出迎えて、応対した。壁に飾られた掛け軸を指さすと「これは婆那婆演底守夜神です。師はこの神をご存じですか」と言った。源信は筆を握ると華厳経の中にある善財童子を称賛した偈をその像の上に書きつけて、「あなたの清

浄な身を拝見しますに、姿かたちは世の中のものを超えておられます」といい、寛印に書き継がせた。寛印がまた書きつけて言うには、「文殊師利のようであり、また仏性を内に宿した宝山王のようです」と。朱は感嘆して、「大蔵の経典は、みな二人の師の腸胃のうちにある」と言って、たいへん尊び敬った。

〔語釈〕

叡山　比叡山延暦寺のこと。

寛印　生没年未詳。平安時代中期の天台宗の僧。出家後比叡山に登り、源信に学ぶ。宮中に奉仕する内供奉十禅師となったが、のちに妻帯している。晩年は丹後国に帰り、古寺に住んで往生極楽を願い、迎講を行った。

俊才　人並み優れた才能。また、その持ち主。

學徒　学問をする人。

蔑視　相手を侮って見下すこと。蔑むこと。

主恩　九三三～九八九。平安時代中期の僧。朝廷の意向に背いたため筑前博多に流されたが、後に許され興福寺にかえり、法相宗を広めた。

顧眄　振り返ってみること。

興福　興福寺。現在の奈良市登大路町にある法相宗の大本山。南都七大寺の一つ。藤原氏の氏寺として久しく盛大をきわめた。また、僧徒は延暦寺の僧兵である山法師に対して、奈良法師として恐れられた。

義學　仏教の体系的な教義についての学問。

麤語　荒々しい言葉。激しい言葉。麤は荒いという意。

朝旨　朝廷の意向。

忤　さからうこと。

東州　関東。あずま。須弥山の東にある東勝神州。

宗乘　自宗の教義。もと禅宗の用語で、禅門の宗義や禅の極致のこと。

四字　国の中心である都の周辺に優れた僧がいないことを指す。中央の仏法が衰えたことのたとえ。

楞嚴　楞厳院。仏教寺院の名称。各地に同名の寺院がある。

源信　九四二～一〇一七。平安時代中期の天台宗の僧。恵心僧都。横川僧都。横川恵心院に住んで著述に専念、『往生要集』を著して浄土教成立の基礎を築いた。また、文学、芸術にも多くの影響を与えた。

朱仁聰　生没年未詳。北宋の商人。永延元年（九八七）以降しばしば来日した。

越　越国。現在の福井県敦賀市から山形県庄内地方の一部に相当する地域。

敦賀　現在の福井県敦賀市。

婆那婆演底守夜神　『華厳経』「入法界品」に登場し、「主夜自尊」の名で知られる。主夜は守夜と転じ、夜を司ると同時に火災や盗難といった厄災から人びとを守るとされる。古くからすべての衆生を救護する神として信仰されてきた。

華厳　華厳経。大乗仏教の主要な経典のひとつ。各章のうち古いのは「十地品」と「入法界品」で、仏陀のさとりの境地を象徴的に描き出している。

善財　善財童子。『華厳経』「入法界品」に登場する、童子の姿をした菩薩の名。発心して文殊から普賢まで五十三人を歴訪して善知識の教えを請い、極楽浄土への往生を願うに至る。仏教修行の段階を示したものとされる。

讃嘆　賛嘆する。称賛する。

偈　経典中で詩句の形式をとり、教理や仏、菩薩を褒め称えた言葉。

相好　顔かたち。顔つき。表情。

文殊師利　文殊菩薩。仏の智慧を象徴する菩薩。釈迦如来の左脇侍。普賢菩薩とともに三尊を形成する。

寶山王　法性を内に蔵している人間のたとえ。

大藏　大蔵経。仏教経典の総集で、一切経、蔵経ともいう。経蔵・律蔵・論蔵の三蔵を中心に、それらの注釈書を加えたもの。

腸胃　腸と胃。胃腸。

〔典拠〕

『元亨釈書』巻第五―慧解二の四「興福寺の主恩」「叡山の寛印」。

（永瀬　恵子）

〔簡傲5〕

源俊賢爲レ郎時。値二侍中闕一。時相問曰。誰堪下二拜侍中一。有上レ忠二於公家一者。答曰。無下レ過二於下官一者上。乃用爲二侍中一①。

〔書き下し文〕

源俊賢　郎爲りし時、侍中の闕くるに値ふ。時相問ひて曰く、「誰か侍中に拜して、公家に忠有るに堪へたる者ぞ」と。答へて曰く、「下官に過ぐる者無し」と。乃ち用て侍中と爲す。

〔訳文〕

源俊賢が五位蔵人であった時、ちょうど蔵人の頭に欠員が生じた。時の中の関白藤原道隆はこう尋ねた、「誰が蔵人の頭に任ぜられ、朝廷に忠節を保つことができようか」と。俊賢は「私にまさる者はおりません」と答えた。そこで俊賢を蔵人の頭に任命した。

〔原注〕

①時藤齊信謂己必當レ補。明義門遇二俊賢朝回一。問云誰作二侍中一。俊賢傲然應云。身已拜矣。

〔書き下し文〕

①時に藤齊信謂へらくは己れ必ず當に補せらるべしと。明義門に俊賢の朝して回るに遇ふ。問ひて云ふ、「誰か侍中と作る」と。俊賢傲然として應へて云く、「身已に拜せられき」と。

〔訳文〕

①その時、藤原斉信は自分が必ず（蔵人の頭に）任ぜられると思った。斉信は明義門で参内して帰ってくる俊賢と出会い、「誰が蔵人の頭に任命されましたか」と尋ねた。俊賢は傲慢に「私がすでに任ぜられました」と返事した。

〔語釈〕

源俊賢　九六〇～一〇二七。平安時代中期の公卿。源高明の三男。母は藤原師輔の女。長徳元年（九九五）参議。寛仁元年（一〇一七）権大納言。治部卿、皇太后宮大夫などを兼ねた。正二位。永延二年（九八八）十月、伊周の後を受けて五位の蔵人。正暦三年（九九二）八月、蔵人の頭に任ぜられた。藤原公任・斉信・行成とともに四納言の一人に数えられた。摂関期の典型的な能吏といえる。

郎　官名。諸省に分属し、部の分科の司の主任。ここでは五位蔵人を指す。

侍中　官名。天子に政務を奏上する官。秦代に置かれ、漢代に加官となる。魏、晋以降専任の官となる。また、唐代、門下省の長官のことも指す。ここでは蔵人の頭にあたる。

闕　完全に備わっているべきものが足りない。

時相　その時の宰相。ここでは中の関白藤原道隆のことを指す。

藤齊信　藤原斉信。九六七～一〇三五。平安時代中期の公卿。太政大臣藤原為光の次男。母は藤原敦敏の女。長徳二年（九九六）参議。のち正二位にすすみ、大納言となる。正暦五年（九九四）八月に蔵人の頭になった。朝儀にあかるく、一条朝の四納言にかぞえられた。詩は『本朝麗藻』などに入っている。

明義門　平安京内裏内郭門の一つ。名義門とも書く。平安京内裏紫宸殿の西北廊の東端にあり、清涼殿・校書殿へ帰る南廊の壁の南側にある門で、無名門と相対し、北の仙花門と並ぶ。

傲然　偉そうに人を見下すさま。

下官　地位の低い官吏。また、官吏が自分のことをへりくだっていう語。

〔典拠〕

『古事談』巻二―二九（一二一八）「俊賢、自薦の事ならびに斉信の振舞の事」。

（馮　超鴻）

〔簡傲6〕

公卿多乘二檳榔車一。王孫英明①未レ達時。乘二檳榔車一。詣二法性寺國忌一。時公卿多集。有レ人云。門前方見二一檳榔一。既非二公卿乘一。殊可レ怪爾。英明在レ座應云。卽身所レ乘。若非二公卿一。不レ許レ乘二檳榔車一。見二何令甲一哉。

〔書き下し文〕

公卿多く檳榔車に乗る。王孫　英明未だ達せざりし時、檳榔車に乗りて、法性寺の國忌に詣る。時に公卿多く集まる。人有りて云く、「門前に方に一の檳榔を見たり。既に公卿の乗に非ず。殊に怪しむべきのみ」と。英明　座に在りて應じて云く、「卽ち身が乗る所なり。若し公卿に非ずんば、檳榔車に乗ることを許さずとは、何れの令甲に見えたるや」と。

〔訳文〕

公卿は檳榔毛の車に乗ることが多かった。皇孫である英明がまだ栄達していなかった時、檳榔毛の車に乗って、法性寺の国忌に出かけた。おりしも公卿はたくさん集まっていた。ある人が、「門前に一台の檳榔車を見かけたけれども、（ここにお出かけの）公卿の乗りものでないからには、まことにけしからんことだ」と言った。英明はその席で、その声に応えて、「（それは）私が乗ってきたものです。もし公卿でなければ、檳榔毛の車に乗ることを許さないとは、何の法令に見えるのでしょうか」と言った。

〔原注〕

①親王齊世之子。寛平帝孫。官左中將。

〔書き下し文〕

①親王齊世の子にして、寛平帝の孫なり。官　左中將なり。

〔訳文〕

①斉世親王の子で、寛平帝（宇多天皇）の孫である。官職は左中将である。

〔語釈〕

公卿　公と卿の総称。公は太政大臣・左大臣・右大臣、卿は大納言・中納言・参議および三位以上の朝官をいう。

檳榔車　檳榔毛の車。牛車の一。白く晒した檳榔の葉を細かく裂いて車の屋形をおおったもの。上皇・親王・大臣以下、四位以上の者、女官・高僧などが乗用した。

王孫　帝王の子孫。また、貴族の子弟。

英明　源英明。生年未詳～九三九。平安時代中期の漢詩人。父は斉世親王、母は菅原道真の女。父が道真の左遷に遭って出家し、幼少時代は不遇であったが、十六歳で四位、十七歳で侍従となり、醍醐天皇の信任も厚く近衛中将を経て、延長五年（九二七）蔵人頭となる。天慶二年（九三九）春に四十歳に満たずに没す。父の遺言で『慈覚大師伝』を完成した。家集『源氏小草』五巻があるが、伝わらず、『本朝文粋』『扶桑集』などに十数首の作品がある。

親王齊世　斉世親王。八八六～九二七。宇多天皇の第三皇子。母は橘広相の女義子。昌泰元年（八九八）元服。ついで三品となり兵部卿、上総守などとなった。延喜元年（九〇一）正月、菅原道真は大宰権帥に左遷されることとなったが、親王も出家して仁和寺に入った。真寂と称し、法三宮と呼ばれた。ついで延喜二年には円成寺に移った。性叡敏にして常に紛争を厭ったと伝えられ、密教に精通し、『慈覚大師伝』をはじめ多くの仏教関係の書を著わした。

寛平帝　宇多天皇。寛平は平安前期、宇多、醍醐両天皇の世の年号。仁和五年（八八九）四月二十七日に改元。寛平九年（八九七）七月以降は醍醐天皇の治世。

法性寺　京都市東山区本町にある浄土宗西山禅林寺派の寺。延長三年（九二五）、藤原忠平が創建。山号は大悲山。開山は尊意。

國忌　天皇崩御の日に、定められた寺院で追善供養の斎会を行うこと。

令甲　最初の詔令。漢代に数世以前の詔令を保存し、発布の前後に依り、令甲・令乙・令丙といった。転じて広く政令の意に用いる。

〔典拠〕

『江談抄』第二―第四十一話「英明檳榔車に乗る事」。

（呂　天雯）

〔簡傲7〕

源隆國。乗二果下馬一。詣二宇治公一。徑到二階前一下。曰。此是非レ馬。唯活屐爾。請免二失禮一。公笑二其諧謔一而容レ之。

〔書き下し文〕

源隆國、果下の馬に乗り、宇治公に詣る。徑ちに階前に到りて下る。曰く、「此は是れ馬に非ず、唯だ活屐のみ。請ふらくは失禮を免れん」と。公其の諧謔を笑ひて之を容る。

〔訳文〕

源隆国は、丈の低い小馬に乗り、宇治殿（藤原頼通）のもとへ赴いた。まっすぐにきざはしの前まで行って馬から下りた。申し上げるには、「これは馬ではなく、ただ生きているはきものにすぎません。どうかお許しをお願いいたします」と。宇治殿はその諧謔を笑って、これを許した。

〔語釈〕

源隆國　源隆国。一〇〇四～一〇七七。醍醐源氏、俊賢の次男。母は藤原忠尹の女。本名宗国。顕基は同母兄。子には隆俊・隆綱・俊明、また鳥羽僧正覚猷がいる。権中納言を経て治暦三年（一〇六七）権大納言に任ぜられた。承暦元年（一〇七七）正二位で引退、出家、没。晩年宇治平等院南泉房に籠り、浄土教要文集『安養集』を編纂、また同所で『宇治大納言物語』を編集したという。

果下馬　背丈低く小さい馬。果樹の下を通りやすい。『後漢書』東夷伝、濊に「有二果下馬一」とあり、李賢注に「高三尺、乗レ之可下於二果樹下一行上」と記す。

宇治公　藤原頼通。九九二～一〇七四。関白を五十年ほど務め、父道長とともに藤原氏の全盛時代を築いた。万寿四年（一〇二七）道長の没とともに宇治院（宇治殿）を相続、永承七年（一〇五二）三月、寺として平等院と号け、治暦四年（一〇六八）四月、関白を辞してからは宇治の別墅に隠棲した。

階前　きざはしの前。庭前。

活屐　活きているはきもの。「屐」は、はきもの。ぞうり、げたの類。

諧謔　おもしろく感ずる言葉。じょうだん、おどけ。

〔典拠〕

『古事談』巻二―六三（一六一）。「頼通、隆国、乗馬にての出入を許さるる事」。

（高橋　憲子）

〔簡傲8〕

勸學院書生集飲。或曰。今日之會。不レ問二歯序一。乃以二才高下一爲レ席。藤隆頼①。乃直進居二上頭一。諸人爭レ之。隆頼曰。文選三十卷。四聲切韻。有二暗誦者一邪。身座乃應レ讓耳。

〔書き下し文〕

勸學院の書生の集飲に、或るひと曰く、「今日の會、歯序を問はず。乃ち才の高下を以て席を爲さん」と。藤隆頼、乃ち直ちに進みて上頭に居す。諸人　之を爭ふ。隆頼曰く、「文選　三十卷、四聲切韻、暗誦の者有りや。身が座乃ち應に讓るべきのみ」と。

〔訳文〕

勸学院の書生が集まり、宴会を開いたときに、ある人が「今日の会合には年齢による序列ではなく、才能の如何で席次を決めましょう」と言った。藤原隆頼はすぐに前に進み出て、最上の座に就いた。一同は我先に席を争った。隆頼は「文選の三十巻、四声の切韻を暗唱できる者はおりますか。もしこの場にお出でなら私の席はすぐにお譲りしましょう」と言った。

〔原注〕

①修理大夫基隆之子。三河守。

〔書き下し文〕

①修理大夫基隆の子にして、三河守なり。

〔訳文〕

①修理大夫基隆の子であり、三河守である。

〔語釈〕

勸學院　藤原氏の氏院、大学別曹の一つ。弘仁十二年（八二一）藤原冬嗣によって創設された。ここから多くの文章得業生や文章生が輩出して、藤原氏の学界、官界進出に寄与した。治承元年（一一七七）に消失した後、再建されたが、衰退の一途をたどった。

歯序　年齢の順序。

爲席　席を敷くこと。

藤隆頼　藤原隆頼。生没年不詳。藤原基隆の子。三河守、出雲守、若狭守を歴任した。

上頭　先頭のこと。上座。

文選三十卷　梁（五〇二～五五七）の昭明太子（蕭統）編の詩文集。三十巻。古代から南北朝に至るまでの詩文を収録し、隋唐以降の文化に大きな影響を与えた。唐代の李善によって注がつけられて現在の六十巻になった。

四聲切韻　南朝斉の永明年間（四八三～四九三）に周顒によって記された韻書であると伝わる。「四聲」とは字音の四種の声調をいい、「平上去入」がこれに当たる。なお後世には隋（五八一～六一八）の陸法言によって『切韻』五巻が作られた。

修理大夫基隆　藤原基隆。一〇七五～一一三二。平安後期の公卿。家

範の長男。美作、播磨、伊予、讃岐等の大国の守に任ぜられた。その間、多くの仏寺、殿邸を造立した。白河、鳥羽両院の別当として活躍したが、特に堀河天皇には乳母子として近習奉仕した。大治五年（一一三〇）には修理大夫従三位に昇進したが、翌々年没した。

〔典拠〕

『古今著聞集』巻第四「文学第五」第一二三「勧学院の学生集りて酒宴の時惟宗隆頼自ら首座に着く事」。

〔備考〕

典拠である『古今著聞集』には「藤原隆頼」ではなく、「惟宗隆頼」となっている。『作者部類』には「六位」の項に尾張国の人で勧学院学頭とある。『詞花和歌集』に作品が載る。

（樋口　敦士）

〔簡傲9〕

源參州頼綱①。世既許二其長一レ於國風一。頼綱恆向二俊頼一言。君欲レ作二佳歌一耶。唯當下具二籩豆一上。尸中祝於我上而已。

〔書き下し文〕

源參州頼綱、世既に其の國風に長ずるを許す。頼綱恆に俊頼に向かひて言へらく、「君　佳歌を作らんと欲するか。唯だ當に籩豆を具して我を尸祝すべきのみ」と。

〔訳文〕

源參州頼綱は、かねて世間から和歌の道に優れていると認められていた。頼綱がいつも俊頼に向かって言うことには、「あなたはすばらしい歌を作ろうとお思いか。ひとえに籩豆をそなえて私を尊崇することです」と。

〔原注〕

①左馬頭頼國之子。

〔書き下し文〕

①左馬頭頼國の子なり。

〔訳文〕

①左馬頭頼国の子である。

〔語釈〕

源參州頼綱　生年未詳～一〇九七。左馬権頭頼国の子。蔵人、下総守、三河守などを経て、嘉保三年（一〇九六）に出家。『後拾遺集』『続詞花集』などに入集。「參州」は三河の異称。

左馬頭　左馬寮の長官。従五位上相当。

頼國　源頼国。生没年不詳。源頼光の子。讃岐守、美濃守などを務めた。

國風　漢詩文に対し、自国の和歌のこと。

俊頼　源俊頼。一〇五五～一一二九。大納言源経信の子。中古六歌仙の一人で、「堀川百首」を主導したほか、白河上皇に『金葉和歌集』を撰上した。歌論書『俊頼髄脳』を著すなど、和歌史上

の功績は大きい。

籩豆　籩、竹製の祭祀・宴饗に用いる器具の名。籩は果実などを盛るたかつき、豆は肉を盛る器。

尸祝　崇拝する。

〔典拠〕

『今鏡』第十「打聞き」。

（折原　佑実）

〔簡傲10〕

秦公景①以レ能二競馬一。被二承安帝寵一。後下毛敦景爲レ對。於二場末一偶爲レ持。帝賞二敦景一亦令二祇候一。公景謂レ人曰。如レ聞敦景與レ我爲レ持以受二恩賞一。若有二勝レ我者一不レ知當レ得二幾賞一。

〔書き下し文〕

秦公景　競馬に能(よ)きを以て、承安帝の寵を被る。後　下毛敦景　對を爲す。場末に於いて偶(たま)たま持を爲す。帝　敦景を賞して、亦た祇候せしむ。公景　人に謂ひて曰く、「聞くが如し、『敦景　我と持を爲して、以て恩賞を受く』と。若し我に勝つ者有らば、知らず當に幾賞をか得べき」と。

〔訳文〕

秦公景は競べ馬に優れているため、寵愛を受けていた。のちに下毛敦景が競べ馬で対戦した。馬場末でたまたま公景と引き分けた。帝は敦景を褒めてお側に仕えさせた。公景がいうには、「聞いての通り、『敦景は私と引き分けて帝から恩賞を賜ったものだ』。もし私に勝つ者がいたら、どれほどの恩賞を得たものかもわからない」と。

〔原注〕

①公正子。

〔書き下し文〕

①公正の子なり。

〔訳文〕

①秦公正の子である。

〔語釈〕

秦公景　生没年未詳。『明月記』建永二年（一二〇七）四月二十八日の条に載る。また、『兵範記』に「左番長秦公景」の名がある。

競馬　馬を競走させる遊戯。くらべうま。

承安帝　承安は高倉天皇の時代の年号。一一七一～一一七五。承安帝は高倉天皇をさす。

下毛敦景　生没年未詳。下野とも書く。下野敦則の子。

場末　馬場の前方にある馬をとめる所。馬場末とも書く。

爲持　引き分けになる。「持」は引き分けにあたる。

祇候　つつしんで貴人のそばに仕えること。伺候。

恩賞　功を賞して官位・所領などを賜ること。また、そのもの。

〔典拠〕

『古今著聞集』巻第十「馬芸第十四」第三六〇話「秦公景下野敦景競馬を勤仕の事」。

（山中　明）

〔簡傲11〕

播府生貞弘善騎レ馬。近鄰有二一陰陽家一得レ馬。招二貞弘一騎試。貞弘心怒二其無禮一。聊且従レ招行騎。廻旋一再。徑騎歸レ家。陰陽家怪來乞レ之。貞弘曰。我謂二汝之素分一。無二敢招レ我令レ試理一。固亦欲二因而遺レ我爾。乃已従二其意一而受領焉。不レ反。

〔書き下し文〕

播の府生　貞弘善く馬に騎る。近鄰に一の陰陽家有りて馬を得たり。貞弘を招きて騎り試みしむ。貞弘　心に其の無禮を怒り、聊か且く招きに従ひて行きて騎る。廻旋すること一再、徑ちに騎りて家に歸る。陰陽家怪しみ來たりて之を乞ふ。貞弘曰く、「我　汝の素分を謂ふに、敢へて我を招きて試みしむる理無し。固より亦た因りて我に遺らんと欲するのみ」と。乃ち已に其の意に従ひて受領す。反さず。

〔訳文〕

播磨の府生貞弘は馬術に長けていた。貞弘の家の近所には陰陽師が住んでいて、馬を手に入れた。そこで、貞弘を招いて試しに乗らせようとした。貞弘は内心、その無礼さに憤りを覚えたが、とりあえず招かれるままに陰陽師の元に行って馬に乗った。貞弘は一、二度輪乗りすると、乗ったまま家に帰ってしまった。陰陽師は不審に思い、貞弘を訪ねて馬を返すよう求めた。これに対し貞弘は、「あなたの本分を察するに、わざわざ私を招いて試し乗りさせる理由はありません。元々、私にこの馬をくれるつもりだったのでしょう」と言った。かくてその意志の通りに、馬をもらいうけて、返さなかった。

〔語釈〕

播　播磨国のこと。山陽道八箇国の一。現在の兵庫県。

府生　昔の六衛府の属官。供奉随身を務め、又、衛府の記録を掌る。

貞弘　生没年未詳。秦貞弘。藤原頼長の『台記別記』久寿二年（一一五五）四月十八日条に「左近衛尉秦貞弘（余随身）」とあり、この時には左大臣藤原頼長の随身であったことがわかる。『続古事談』第五（諸道）には、誰一人として乗りこなせない癖馬に乗ろうと、何度も果敢に挑戦し続けた「心高さ」を藤原頼長に賞され、褒賞にあずかるという話が載る。この話からも貞弘は、自身の馬術に対してよほどの自信を持っていたことが窺える。

陰陽家　中務省陰陽寮に属し、天文・暦数・占い等に従う者。また一般に、陰陽の術を行う者。陰陽師。

聊且　姑且に同じ。とりあえず。さしあたって。

廻旋　めぐりまわる。めぐらす。回旋。

一再　一、二度。少ない頻度。

素分　平素の性分。本分。

受領　もらう。うけとる。自分のものにする。

〔典拠〕

『古今著聞集』巻第十「馬芸」第十四「播磨府生貞弘陰陽師の馬を乗

試みて返さざる事」。

（奥田　惇）

〔簡傲12〕

西行風氣高邁。兼善二雅詠一。見レ重二於世一。高雄文覺。初聞二其名一。甚醜レ之曰。伊已遁レ世邪。唯當三靜修二佛理一。何故風流自處。嘯詠浮遊。且走二高門一乎。吾見必當三擊二碎頭腦一。會高雄修二法華會一。西行來觀二道場一。徘二徊花下一。高雄之徒。已知二其西行一。慮二其師暴猝一。默護不レ告。既而西行通レ謁曰。某今奉二觀道場一。日暝。願假二一宿一。徒輩不レ得レ已通レ之。文覺果戟レ手待レ之。已入。覺熟視少時。廢然起迎。延レ之相見曰。久欽二高名一。不レ圖辱臨。歡語移レ時。供具備至。到レ明而別。其徒怪問レ之。覺曰。爾等不レ曉乎。恐伊能打レ人。吾安得レ打①。

〔書き下し文〕

西行　風氣　高邁なり。兼ねて雅詠に善く、世に重んぜらる。高雄の文覺、初め其の名を聞き、甚だ之を醜みて曰く、「伊（か）れ已に世を遁るるか。唯だ當に靜かに佛理を修すべきのみ、何の故か風流に自ら處り、嘯詠浮遊し、且つ高門に走るや。吾見ば必ず當に頭腦を擊碎すべし」と。會（たま）たま高雄　法華會を修す。西行來たりて道場を觀る。花下に徘徊す。高雄の徒、已に其の西行なることを知り、其の師の暴猝を慮り、默護して告げず。既にして西行　謁を通じて曰く、「某今　道場を奉觀す。日暝れぬ。願はくは一宿を假らん」と。徒輩已むことを得ずして之を通ず。文覺果たして手を戟して之を待つ。已に入る。覺　熟視すること少時にして、廢然として起ちて迎へ、之を延（ひ）きて相見して曰く、「久しく高名を欽ず。圖らざるに辱臨せらる」と。歡語　時を移し、供具備さに至る。明に到りて別る。其の徒怪しみて之を問ふ。覺曰く、「爾等曉（さと）らずや。恐らくは伊（か）れ能く人を打せん。吾安んぞ打することを得ん」と。

〔訳文〕

西行は気品が高く、加えて詩歌を吟唱することに長け、人々に重んぜられていた。高雄の文覚は当初、その名を聞いて非常に彼を嫌って、言うことには、「彼は既に俗世を遁れた身なのか。静かに仏の教えに専念すべきだ。なぜ風流に身を置き、詩歌を吟詠してめぐり歩き、また、富貴の屋敷に出入りするか。私は彼と出会せば、必ず彼の頭を打ち砕くだろう」と。たまたま文覚が法華会を行ったところ、西行が道場を参観しに来て、花のもとをめで歩いていた。文覚の弟子たちは、早くも西行であることが分かり、師がいきなり西行に暴力を振るうことを心配し、黙って西行を守り、告げなかった。やがて、西行は面会を乞い求めてこう言った。「私は今日、道場を参観させていただきました。日が既に暮れましたので、一晩の宿をお貸しください」と。弟子たちはやむを得ずこれを伝えた。果たして、文覚は握りこぶしを作って彼を待ち構えていた。西行が内に入ると、文覚はしばらく彼をじっと見て、すべてを忘れ果てたように、立ち上がって迎え、彼を内に招き入れた。挨拶して、「久しくご高名を仰ぎ慕っております。思

いがけずここにご来臨をかたじけのういたしました」と言った。楽しく話し合って時を過ごし、食膳などが次から次へ運ばれて来た。夜明けになって別れた。文覚の弟子たちは不思議に思ってそのわけを聞いた。文覚は、「おぬしらは分からないか。恐らく彼は人を打つだろう。ならば、どうして私は彼を打つことができようか」と。

〔原注〕

①文覺顚狂。初坐二惡言一。流二竄豆州一。將レ發レ都。廳徒管送者。心望レ有レ賂。乃勸二諭之一曰。當二共遠赴一。諸如レ是時。必有二餞贐一。況上人名高。相識應多。那不二一試告行一。覺曰。既是出家乞食。有二何親故一。但亦不レ得レ已。則東山有二一舊要一。曾已相許。生死不二相棄一。乃當二貽レ書以乞一レ物耳。促レ具二紙墨一。徒輩喜而營求。覺乃見二其紙一。叱擲レ之曰。爾奴無禮。伊人清高。今將二多得一レ物分一レ爾。那用二如許麤惡一。徒既怒二其奴呼一。而忍且求二好紙一至。覺曰。吾不レ能レ書。須二善書人一。徒復奔走。請二書手一至。覺曰。具二飲酒一來。潤二筆書師一。徒者稍苦二其煩費一。不レ可二中止一。乃典二賣所一レ帶供辦。既乃書手請二其辭一。覺口占曰。覺今當二遠訣一。人命朝露。固不レ足レ惜。但亦一日之儲。不レ可レ無爾。因請二向所一レ寓行糧一。鵞眼百貫。粟米百石。伏乞見レ附二使者一。畢問二所レ與姓氏一。覺曰。清水寺觀音房足下。徒輩營走之餘。俄悟二其浪謔一。恨怒爭罵不レ止。覺不レ顧。獨且大笑絶倒。良久曰。請更與二汝等一平。且聽二吾言一。夫觀音大悲利生。廣大圓滿。何求不レ得。且汝等貪欲。強責二空手人一。吾乃轉乞二觀音一。而欲厭レ汝。非二吾過一也。遂送至二攝鄉舍一。待二船發一。船子來宿二艫下一。夜更覺寤在二戸内一。適聞二船子相語一云。此僧前募緣。財物必多。吾輩巧誑。乃可二取得一耳。語罷而睡。覺佯爲レ不レ聞。乃及レ曉。獨在二戸内一。鳴二念珠一。微聲私祝曰。頂二禮吾山護法天童一。弟子向爲二神護寺造營一所レ募。積已百金。密藏二五條天神華標左柱根三尺所一。願護二晝夜一。迄二弟子歸上一。無レ有二盜失一。船子竊聞。待レ旦與二儕輩一急赴レ京。掘二五條標柱左下一三尺許。不レ見レ物。更穿五尺。竟無レ物。相謂云。眠中髣髴。或有レ失レ聞。又穿二右柱一。俄而華標倒矣。驚逃。歸到二攝鄉舍一。會鄉人亦咎二覺顚一。方罵。船子乃進。自言二華標事一。怒二覺虛誕一。覺曰。汝不レ知乎。此大地之底。稱二金輪際一。布レ金滿塞。汝那不三穿到二其際一。且吾所レ埋。北野天神爾。非二五條天神一。汝更赴レ京。求レ此乃得。因傲笑。送者皆憤。每レ事使レ困。既發二海上一。神驗頗多。於レ是後皆懼謝罪。

〔書き下し文〕

①文覺　顚狂なり。初め悪言に坐し、豆州に流竄せらる。將に都を發せんとす。廳徒の管送する者、心　賂有るを望み、乃ち之に勸諭して曰く、「當に共に遠赴すべし。諸もろ是の如き時、必ず餞贐有り。況んや上人の名高きをや、相識るは應に多かるべし。那ぞ一たび試みて告行せざらんや」と。覺曰く、「既に是れ出家して乞食す。何の親故有らんや。但だ亦た已むを得ず、則ち東山に一の舊要有り。曾て已に相許す。生死　相棄てず。乃ち當に書を貽りて以て物を乞ふべきのみ。紙墨を具ふるを促す。徒輩　喜びて營求す。覺乃ち其

の紙を見て、叱りて之を擲ちて曰く、「爾奴　無禮なり。伊の人　清高なり。今將に多く物を得れば、爾に分けんとす。那ぞ許の如く麤惡なるを用ゐん」と。徒既に其の奴呼に怒るも、忍びて且く好き紙を求めて至る。覺曰く、「吾　書く能はず。善く書く人を須ひん」と。徒復た奔走し、書手を請ひて至らしむ。覺曰く、「飲酒を具へて來たれ。筆書の師を潤せ」と。徒者　稍其の煩費に苦しむも、中止すべからず。乃ち帶ぶる所を典賣して供辦す。既にして乃ち書手　其の辭を請ふ。覺　口占して曰く、「覺今當に遠訣すべし。人命　朝露なれば、固より惜しむに足らず。但だ亦た一日の儲け、無かるべからざるのみ。因りて向に寓する所の行糧を請ふ。鴛眼百貫、粟米百石、伏して乞ふらくは、使者に附せられんことを」と。畢りて與ふる所の姓氏を問ふ。覺曰く、「清水寺觀音房足下」と。徒輩　營み走るの餘り、俄かに其の浪謔を悟る。恨み怒りて爭ひて罵ること止まず。覺顧みず。獨り且つ大笑して絶倒す。良久しくして曰く、「請ふらくは更めて汝等と平らがんことを。且く吾が言を聽け。夫れ觀音　大悲利生、廣大圓滿、何ぞ求めて得ざらんや。且つ汝等貪欲にして、強ひて空手の人を責む。吾乃ち轉じて觀音に乞ひて、汝を厭かしめんと欲す。吾が過ちに非ざるなり」と。遂に送りて攝鄉舍に至る。船の發するを待つ。船子來たりて廡下に宿す。夜更け、覺寤めて戸內に在り。適たま船子相語るを聞くに云く、「此の僧前に募緣す。財物必ず多し。吾が輩巧みに誑かさば、乃ち取りて得るべきのみ」と。語り罷りて睡る。覺　佯りて聞こえざるを爲す。乃ち曉に及び、獨り戸內に在り、念珠を鳴らし、微聲に私かに祝して曰く、「吾が山の護法天童に頂禮す。弟子向に神護寺の造營の爲に募る所、積へて已に百金なり。密かに五條天神の華標の左柱の根の三尺の所に藏す。願はくは晝夜に護り、弟子　歸上するまで、盜失有る無きことを」と。船子竊かに聞き、旦を待ちて儕輩と急ぎて京に赴く。五條の標柱の左下を掘ること三尺許なるも、物を見ず。更に穿つこと五尺なるも、竟に物無し。相謂ひて云く、「眠中　髣髴たれば、或いは聞くを失ふ有り」と。又た右柱を穿つ。俄かにして華標倒る。驚きて逃ぐ。歸りて攝鄉舍に到る。會たま鄉人も亦た覺　顚なるを咎め、方に罵る。船子乃ち進み、自ら華標の事を言ひ、覺の虛誕に怒る。覺曰く、「汝知らざらんや。此の大地の底、金輪際と稱す。金を布きて滿ち塞ぐ。汝那ぞ穿ちて其の際に到らざらんや。且つ吾埋むる所、北野天神のみ。五條天神に非ず。汝更に京に赴き、此を求めば乃ち得ん」と。因りて傲笑す。送る者　皆憤る。事毎に困らしむ。既に海上に發すれば、神驗頗る多し。是に於いて後に皆懼れて謝罪す。

〔訳文〕

①文覚は癲狂な人柄であった。かつて、罵詈雑言のために罪せられ、伊豆に流された。まさに都を出発しようとする際、護送の役人たちは、心の内で賄賂がもらえることを望み、文覚に勧めてこう説いた。「一緒に遠くに出掛けましょう。およそこのような時には、必ずや餞別があるものです。まして、上人さまのような高名な方は言うま

でもありません。知り合いも多いはずです。どうして一度試しにその人たちに別れの挨拶をなさらないのですか」と。文覚の言うことには、「私はもはや出家して乞食の身です。親戚や昔の友人などがいるでしょうか。もしやむを得ないということであれば、東山に旧友がいます。昔に互いに許し合った仲です。死んでも相手を見捨てはしません。彼に手紙を送って物を乞い求めましょう」と。紙と墨の準備を促すと、役人たちは喜びいさんで探し求めに行った。文覚はその紙を見ると、彼らに叱りつけて紙を投げ飛ばしてこう言った。「おぬしらは無礼者だ。あの方は気高く、もしたくさんの物を手に入れたら、おぬしらに分けようと思っていたが、それなのにどうしてこのように粗くて悪い物を用いようか」と。役人たちは、文覚が自分たちを卑しめて呼んだことに怒っていたが、とりあえず我慢して品質のいい紙を探して持ってきた。文覚は、「私は手紙が書けない。上手に書ける人が要るのだ」と言った。役人たちは奔走して探しに行って、書き手を頼み込んで来てもらった。文覚は「飲む酒を準備して来い。代書の師匠にたっぷり振舞え」と言った。役人たちは少しその冗費に苦しんだが、やめることもできなかった。そこで身につけているものを質に入れ、酒肴を振舞った。やがて、代書の人はその手紙の文面を尋ねると、文覚は思ったままを口にして言うことには、「私は今遠くあなたとお別れします。人間の命は朝露のようなものですが、もとより惜しむに足りるものではありません。されど、一日の備えなども、なくてはいけません。それでさらに、私にくださる食糧を乞い求めます。穴あき銭一百貫、食糧一百石を、使いの者にお渡しくださいますように」と。書き終わり、その送り先の名前を聞くと、文覚は「清水寺観音房足下」と言った。役人たちは怠けずに奔走した上に、ふと文覚がからかっていると思い込んで、恨みことを言っては怒り、争い罵り、やめなかった。文覚は相手にしないで、一人でひどく笑い転げた。しばらく経って言うことには、「改めてあなたたちと仲直りをさせてください。とりあえず私の言葉を聞いてください。観音菩薩は人を苦しみから救い、衆生に利益を授け、その慈悲が広くて世界に満ち、欠ける所がありません。何を求めても得ないことがありましょうか。それに、あなたたちは欲深く、何も持っていない者を責め立てます。そうであれば私は変わって観音にお願いして、あなたたちを飽きさせるのです。これは私の過ちではありません」と。ついに彼を送って摂郷舎に着いて、船の出発を待っていた間、水夫たちは家の軒下に泊まっていた。夜が更け、文覚は目が覚めて戸口の内におり、ちょうど水夫たちの会話が聞こえた。「この僧はここに来る前に寄進を募っていて、財物がきっと多いだろう。我らが上手にたぶらかせば、それを手に入れられるだろう」と、話しが終わると眠ってしまった。文覚は聞かなかったふりをして、夜が明けると、一人で戸口の内で、数珠を鳴らして小さな声で祈って、「吾が山の護法天童に頂礼します。弟子がこの前に、神護寺の造営のために募ったお金は、積もり積もってすでに百金になります。（私は）密かに五条天神の鳥居の

左柱の根元三尺のところに隠しました。それを昼夜に守り、弟子が都に帰るまで、盗まれて無くなることがありませんように」と言った。水夫たちは密かに聞いていた。日が昇るのを待って仲間たちと急いで都に赴き、五条天神の鳥居の柱の左下を三尺ほど掘ったが、物が見つからなかった。さらに五尺掘っても、結局のところ何もなかった。水夫たちがこう言った、「寝ている間のことで、ぼんやりしているから、ひょっとしたら聞き漏らしたかもしれない」と。また右の柱も掘った。やがて、鳥居が倒れた。水夫たちは驚いて逃げ去った。渡辺に帰りつくと、ちょうどその土地の人が、文覚が癲狂なことを非難して罵っている最中であった。水夫たちは前に進み、自ら鳥居のことを言い出し、文覚がついた嘘に怒った。文覚はこう言った、「あなたたちは知りませんか。この大地の底は、金輪際と言い、金を一面に敷いて満ちています。何故そこまで掘り至らないのですか。しかも、私が埋めたところは、北野天神であり、五条天神ではありません。もう一度都に赴き、これを求めれば手に入るのでしょう」と。そこで嘲笑っていた。護送の人たちは皆憤慨し、ことあるたびに文覚を困らせた。すでに海上に至って、文覚はとても多くの神験を表した。かくして後には、皆それに畏怖し、文覚に詫びた。

〔語釈〕

西行　一一一八～一一九〇。平安後期の歌人、僧。俗名は佐藤義清（のりきよ）。法名は円位。西行は号。鳥羽院に北面の武士として仕えたが、二十三歳で出家。草庵に住み、また諸国を行脚して生涯の大半を奥州から九州までさすらいの旅で過ごして歌を詠んだ。花と月の歌がおおく、独自の歌風は飯尾宗祇、松尾芭蕉らに影響をあたえた。家集に『山家集』がある。『新古今集』には九十四首が載っている。

風氣　上品な人柄。優れた様子。風度。気象。

高邁　高く優れる。超邁。

雅詠　風雅に吟唱すること。

高雄　京都市西部、右京区の愛宕（あたご）山東麓の地。高尾とも書き、北に接する栂尾（とがのお）、槇尾（まきのお）とともに三尾とよばれ、古来紅葉の名所として知られる。高雄山中腹には神護寺がある。

文覚　一一三九～一二〇三。平安末期・鎌倉初期の真言宗の僧。俗名は遠藤盛遠。もと北面の武士で、誤って袈裟御前を殺して出家。神護寺再興を強訴したため伊豆に流されたが、そこで源頼朝の挙兵を助け、頼朝開府後に神護寺を復興した。のち佐渡や対馬に流され、九州で没したという。

遁世　俗世との関係を絶って静かに暮らすこと。また、俗世との関係を絶って出家すること。

風流　雅やかなこと。品格の優雅なこと。また、俗事を捨てて高尚な遊びをすること。風雅。

自處　自分で自分のことを処置する。また、自分の身の置きどころ。

嘯詠　詩歌を吟詠すること。嘯は、口をつぼめて呼気を押し出して声

を出すこと。中国の古い発声法である。古くから道士の丹念法として伝わっている。のちに拡大転用して、詩歌の朗吟または創作にまで嘯の字を用いる。

浮遊　ぶらぶら遊び歩く。周流して遊ぶ。

高門　富貴の家。貴顕の家。

撃砕　打ち砕く。

法華會　法華経を講説する法会。法華八講、法華十講などがある。東大寺、興福寺のものや比叡山延暦寺の霜月会などが有名。京都市の神護寺では、陰暦三月十日に行なったという。

道場　仏をまつり供養する所。寺。また、仏教や道教などの修行をする所。

徘徊　さまよい歩き回る。また、行ったり来たりする。

暴猝　暴、猝とも、にわかの意である。また、暴は打ちかかる意もあり、ここでは、打つことが急である意を指すか。

通謁　名刺を差し出して面会を請うこと。謁、自分の姓名をしるしておいて、人に会ったときに渡す札。名刺。

戟手　怒って人を打とうとする時、片手を振り上げ、片手の肘を下に屈げて戟のように張る。一説に、握りこぶしを打ちふる。

熟視　じっと見つめること。凝視。

少時　しばらく。暫時。少刻。

廃然　今までのことを忘れはてるさま。

延　ひく。人をひっぱる。案内してひき入れる。

相見　あい見える。対面する。

欽　つつしむ。えらいと思って、かしこまる。また、尊敬して慕う。

辱臨　貴人の来臨に対する謙辞。おいでをかたじけなくする。

歓語　楽しく話し合う。款語。

供具　宴会の用具。

顚狂　気が狂うこと。

豆州　伊豆の別名。

流竄　罪によって遠い地方へ流す。竄は、狭い所へ押し込める意である。

廳徒　役所の役人を言う。廳は役所、官衙の意。

管送　罪人を監視して送り、護送すること。管は取り締まる意。

餞贐　餞も贐もはなむけの意であり、行く者に供える酒食や、贈る礼物や貨賄などを指す。

告行　告別する。別れを告げる。

親故　親戚の者と昔なじみの人。

舊要　旧い交わり、昔の交友、旧友。

営求　求め捜す。

清高　気高いことを言う。

爾奴　おれめ。相手を卑しめて言う意。

麤悪　粗くて悪い。粗末なこと。麤は粗い意。

奴呼　人を卑しめて呼ぶこと。

書手　書き役。

煩費　煩わしく費用が多いこと。
供辦　提供して手配する。
典賣　将来原価を支払って買い戻すという条件付きで物を売り渡すこと。
口占　腹案した文辞を口ずさんで人に授ける。
遠訣　別れて遠く離れた所に行く意。訣は別れる。
人命朝露　『漢書』「蘇武伝」に、「人生　朝露の如く、何ぞ久しく自ら苦しむこと此の如きならんや」とある。朝露は朝方におりた露であり、人生などのはかないことをたとえていう語。
儲　備え、蓄え。
寓　寄せる。与える。
行糧　兵丁が在営中に給与されるふち米。
鴛眼　鴛眼銭。古代の一種の品質が悪い銭。孔の空いている銭。あなせん。鳥目。孔方。
貫　貨幣一千銭の称。
粟米　あわと米。また、小米を言う。食糧のことを指す。
石　容量の単位。一石は十斗。
足下　相手に対する敬語。おもと。
浪謔　かって気ままでふざける。放蕩戯謔。
絶倒　転がるほど、ひどく笑う。
大悲　仏教用語。広く衆生の苦しみを救うという仏の大きな慈悲。観音は大慈大悲観世音菩薩と呼ばれている。
利生　仏教用語。衆生を利する。人に利益を授ける。
廣大圓滿　広大は広く大きい。円満は十分に満ち足りていること。ここでは広大円満を使って、観音菩薩の慈悲が広くて世界に満ちて遍在し、欠ける所がないことを指す。広大円満という語は観音菩薩と関わりがあり、『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼』にも用いられている。
厭　飽きる。いとう。
攝鄉舍　典拠の中で『源平盛衰記』巻第十八「同人清水状・天神金」には、「其夜ハ渡辺ニ着ヌ」となっている。「渡辺の渡し場にある宿屋」の意か。
船子　船頭の指揮の下にある水夫。船人。
廡下　軒の下。廡はのき、また、堂の下の両わきにある廊下の意。
募緣　有縁の人から浄財を募る意。奉加。
頂禮　頭を地面につけて、その人の足もとにおじぎをする。五体投地。
造營　社寺や宮殿などを建てること。
華標　華表。神社の鳥居の漢訳語。
儕輩　仲間。ともがら。
髣髴　ぼんやりしてはっきりしないさま。かすか。ほのか。彷彿。
虛誕　根拠のないことを大げさにいうこと。いつわり。でたらめ。
金輪際　仏教用語。仏教で、世界の最下を風輪、その上に水輪、その上に金輪、その上に地輪があるとし、水輪と金輪との境界を金輪際と言う。

傲笑　おごりたかぶって笑うこと。人を見くだして笑うこと。

神験　神の霊験。不思議な霊験。

〔典拠〕

『井蛙抄』第六雑談「心源上人語云」の条。

『源平盛衰記』巻第十八「同人清水状・天神金」。

『平家物語』巻第五「文覚被流」。

（馮　超鴻）

〔簡傲13〕

西大寺静然上人。扶レ老而朝。白眉折腰。龍鍾甚苦。西園内府①側見。乃起敬曰。嗚呼。尊宿哉。藤資朝従レ傍謂曰。是徒年老耳。明日使二人幸二衰茸一老尨一遺二内府一曰。是可レ尊爾。

〔書き下し文〕

西大寺の静然上人、老を扶けて朝す。白眉折腰、龍鍾甚だ苦しむ。西園内府　側自り見て、乃ち起敬して曰く、「嗚呼。尊宿かな」と。藤資朝　傍自り謂ひて曰く、「是れ徒に年老いたるのみ」と。明日　人をして衰茸の一の老尨を幸かしめて内府に遺りて曰く、「是れ尊ふべきのみ」と。

〔訳文〕

西大寺の静然上人は、自ら杖をついて宮中に参上した。眉が真っ白で腰が曲がっており、ひどく年老いていた。西園寺内大臣（実衡）は側からその様子を見ており、敬老の思いが芽生えて、「ああ、学徳ある老僧であることよ」と言った。資朝が傍から言うことには、「彼はただ年老いているだけである」と。翌日、資朝は、老いて痩せ衰えている一匹のむく犬を下人に引かせ、内大臣のところに贈り届けて「この犬も敬ってやりなさい」と言った。

〔原注〕

①實衡。左府公衡之子。官内大臣。

〔書き下し文〕

①實衡、左府公衡の子にして、官は内大臣なり。

〔訳文〕

①実衡は左府公衡の子であって、官位は内大臣である。

〔語釈〕

西大寺　南都七大寺の一つ。現在は奈良市西大寺町にある真言宗の本山。中世、睿尊が再興し、戒律の道場となった。

静然　生年未詳～一三三一。睿尊から第四代に当たる西大寺の長老。律宗の僧。文章博士日野敦宗の孫、日野有成の息子、良澄。

扶老　竹の名。転じてその竹で作った杖。ここでは、老いを助けるものとしての杖の意味である。

折腰　腰の曲がっている身体。

龍鍾　年老いてやつれたさま。

西園内府　西園寺実衡。一二九〇～一三二六。鎌倉時代後期の公家。関東申次。実兼の孫、公衡の子。元亨四年（一三二四）、内大臣となる。実衡の関東申次時代には、正中の乱がおこるなど後

醍醐天皇による討幕の機運が高まり、朝廷と幕府の間には問題が山積した。内府は内大臣の唐名。

左府公衡　西園寺公衡。一二六四～一三一五。鎌倉中・末期の公卿。関東申次。太政大臣西園寺実兼の子。延慶二年（一三〇九）に、左大臣となる。日記に、『公衡公記』（『竹林院左府記』『林中記』ともいう）があり、弘安六年（一二八三）から正和四年（一三一五）に至るまでの記録が収められている。左府は左大臣の唐名。

起敬　敬う心を起こす。また、いよいよ敬う。

尊宿　仏徒の参学師事すべき学徳ある老年の高僧。尊老。

藤資朝　日野資朝。一二九〇～一三三二。鎌倉末期の公卿。権大納言日野俊光の子。後醍醐天皇の寵臣。元亨元年（一三二一）、参議に任ぜられた。同四年に権中納言となったが、天皇の倒幕の計画が漏れて捕えられ、佐渡に配流。正慶元年（一三三二）に刑死。四十三歳。この話に出てくる西園寺実衡と日野資朝は同じ年齢で、どちらも正応三年（一二九〇）の生まれであった。

衰耄　「衰」は「おとろえる」、「耄」は「乱れる」を表すことから、老衰しているさま。

尨　むくいぬ。むくむくと毛が多い犬。一説に、毛が多くて雑色の犬。

〔典拠〕

『徒然草』第一五二段。

（篭尾　知佳）